

運動有能感とコミュニケーション・スキルとの関連性 についての研究

桂 拓真 (岡山大学)

1. 目的

本研究の目的は、コミュニケーションを捉える上で ENDCOREs が有効であるという考えのもと、この尺度を用いて運動有能感とコミュニケーション・スキルの関連を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

須田 (2011) で運動有能感と社会的スキルの関連が研究によって明らかとなった。しかし当研究で使用した相川ら (2005) の尺度には課題が存在するが、それを問題視せずに須田は研究を行った。それを疑問視した本研究による、代替尺度を用いて再検討するものである。

- 1) 調査対象 O 大学の学生 442 名 (男性 271 名、女性 169 名、無記名 2 名、年齢 18.88 ± 1.00)
- 2) 調査時期 令和元年 6 月
- 3) 調査方法 岡沢ら (1996) が開発した運動有能感尺度を用いて、質問紙調査によって 5 件法で得点化した。また藤本・大坊 (2007) がモデリングしたコミュニケーション・スキルの尺度である ENDCOREs を用いて、質問紙調査によって 7 件法で得点化した。
- 4) 分析方法
 - ・運動有能感によるコミュニケーション・スキル得点差の検討を一元配置分散分析
 - ・コミュニケーション・スキルによる運動有能感得点差の検討を一元配置分散分析

3. 結果と考察

- 1) 運動有能感によるコミュニケーション・スキル得点差の検討
運動有能感得点はコミュニケーション・スキル得点のすべてにおいて有意であった。したが

って運動有能感の高さが対人コミュニケーションに何らかの影響を与えていることが示唆された。

2) コミュニケーション・スキルによる運動有能感得点差の検討

コミュニケーション・スキル得点は運動有能感得点のすべてにおいて有意であった。したがってコミュニケーション・スキルの高さが運動有能感の向上に何らかの影響を与えていることが示唆された。

4. 結論

本研究では、ENDCOREs を用いることで運動有能感とコミュニケーション・スキルとの関連を明らかにした。須田 (2011) の研究とは異なり、本研究では運動有能感と「自己統制」に相関がみられたため、新たな発見となった。

本研究では運動有能感とコミュニケーション・スキルの相関を検討したもので因果関係までは明らかになっていない。今後は因果関係を明らかにするために、競技前後での各スキルの変化を縦断的に調査し、教育現場等で効率的に向上させることができると考える。

5. 主な参考文献

- 1) 相川充・藤田正美 (2005), 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成 東京学芸大学紀要 1 部門 56 87-93
- 2) 藤本学・大坊郁夫 (2007), コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究 15(3) 347-361
- 3) 須田和也 (2011), 大学生の社会的スキルとスポーツ経験および運動有能感に関する研究 共栄大学研究論集 9 37-53